

巻頭言 「愛の署名」

宇野 元

マリリン・ロビンソンの作品を読んでいると、思わずハッとさせられる情景に出会います。あるいは、水や光に宿る神秘的に。彼女は子どものころ、お兄さんに、お前は詩人になると言われたそうですが、なるほど、この作家の秘密を明かしてくれるエピソードであると思います。一昨年、不思議な巡りあわせによって、『ギレアド』に続いて、ロビンソンの処女作の邦訳が出ました（『ハウスキーピング』篠森ゆり子訳、河出書房新社）。処女作を読むと、いま述べたことが、ロビンソン作品の最初からの持ち味であることがよくわかります。

『ギレアド』には、たとえば、こんな印象的な一行があります。

夜の木々は特別な音をたてる。また、特別な香気を放つ。

『ギレアド』は、自然の美しさ、深さが、エイムズ牧師のペンを通して語られるところに特色があります。そしてエイムズ牧師の思索の背後に、作者の思索が重なるでしょう。そこに私たちは、信仰の想像力による、聖書のイメージの展開をみることができます。小説の終わり近くに、次のようなくだりがあります。

ぼくは大草原が大好きだ。何回となく日の出を見た。暁の光が射し初め、たちまちあたり一帯を照らす。すべてのものがいっせいに輝き出す。そのたびに、「よい」という言葉に深くうなずく思いがした。このような出来事に立ち会えるのは驚きだよ。もっとすばらしい、最初の一瞬が存在しただろう。「そのとき、夜明けの星はこぞって喜び歌い、神の子らは皆、喜びの声をあげた。」ぼくはこれと正反対の状況をたくさん見てきたが、それにもかかわらず、世界はいまも歌い、喜びの声をあげている。そしてたしかにそうするじゅうぶんな理由がある。

今の日本と世界についても、このことが当てはまるでしょう。混沌、混乱、乱雑、雑然の中でありながら、さらに大きな豊かな励ましに囲まれています。朝日を受けて輝き出すすべてのものに、世界の創造者の署名が記されています。「よい」というサインが。そして、私たち自身が混乱の中にあるときも、神の愛に包まれていることを知らせてくれます。